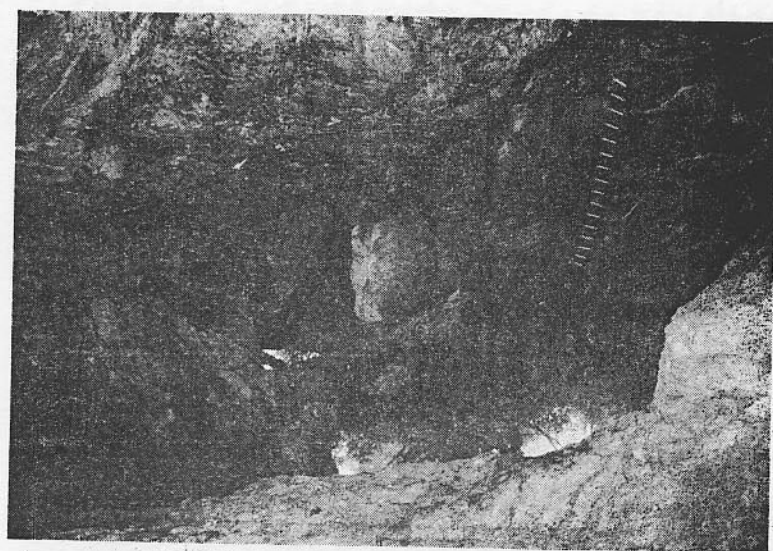


し新発見した第Ⅱの堅穴（銀鳳洞）より、青海千里洞に求めた方法でその「神秘の門」をたたく事も期待できる方法である。その他の手がかりとして、日本石灰開発KKに福来口周辺の地下測量地図が記録されていると聞いている。この測量図を参考資料に提供してもらえれば努力すべきであろう。結果は第2義的問題としてマイコミ平から福来口まで標高差約500m距離4000mにも及ぶ洞窟があるとするなら何とすばらしい事だろう。「幻の大横穴」の発見は今後の我々探検部洞窟パートの課題であり最大の夢である事には全員異論はないと思う。

8. マイコミ平の堅穴洞窟

——銀 鳳 洞——

木 本 貴 夫



銀鳳洞とは、今回の第5次調査に於いて発見した堅穴洞窟を私達が命名したものである。大マイコミ附近より銀路谷に入り、地を這うように茂るブッシュ地帯を1本の細い沢を足掛かりに東方へ300m詰めた所に小さな滝がある。銀鳳洞は、こ

の滝を登らないで左に20m程折れた所にある。この沢には、至る所吸い込みやドリーネがあり、白く冷たいガスを吐き出している。おそらく千里洞・大マイコミ・銀鳳洞などと地底で通じているのだろう。さて銀鳳洞は四方を猛烈なブッシュで囲まれた中で直径6m程の口を3つ開けている。三方より入り込んだ沢により侵蝕されたものである。1つの口

よりワイヤ梯子で5 m降りると急勾配をもつ洞床に着く。泥や腐敗した枝葉。今にも崩れ落ちそうな岩の群。恐る恐る15 m下ると堅穴部分の入口に着く。今回は偵察がてらの試降だったので正確な測量は行なっていないが、この洞口は直径10 m×8 mはあろうか。この附近より天井を仰ぎ見ると、あたかも2本の石橋が虹の如く宙に浮いている。それと共に3つの空間より差込む陽光がこのホールを幻想の世界に導びいている。1つの岩角に梯子をセッティングし、垂直に約10 m下降すると畳8枚程の大テラスに着く。洞壁は、先程のホールとは打って変って白くすべすべしている。この緩い傾斜のテラスよりもさらに垂直に20 m下降すると第2テラスに着く。地上より延べ50 mの地点である。洞内はトンネルを立てたような格好である。このテラスより強力ライトで下方を照らすと約80℃の傾斜でさらに50 m程続いており、底には雪溪が横たわっている。壁は白くて美しいがぎっしりと浮石を抱いている。ちなみに石を投げると、それが壁にぶち当り、洞内に反響する号音と共に落石が落石を呼び地底の闇に消えて行く。今回は偵察であり、人員も装備も不足しているのでこのテラスよりは下降していないが、この銀鳳洞もおそらく青海千里洞級の基模を有する堅穴洞窟と思われる。

—— 銀 路 洞 ——

角 野 二 郎

不屈の洞窟と言われて来た青海千里洞も、第五次調査の時には、その計画段階に於いても、もう時間の問題であるという感が強かった。つまり、我々の目的は最早青海千里洞解明ではなく、マイコミ平一帯の総合調査によるより高度なケイビングの遂行にある。事実、第五次調査の最大の目的は、青海千里洞解明に附随して、マイコミ平に散在する多数のドリーネや吸込み（沢水が洞窟の中へ流れ込んでいる所）と麓の福来口との関連性を調査する事であったのである。その対象として、以前から注目していた銀路鉢と新マイコミが挙げられた。幸い青海千里洞調査が予定通りに済み、5日間の予備日がこれらの洞窟調査にあてられた。

8月11日、この日は休養日であったが、散歩がてらに、ワイヤ梯子のフィックス地点等を偵察する為、銀路鉢へ向かった。航空写真によると、銀路鉢は青海千里洞の北東側、尾根一つ越えたあたりに有り、直径は100～120 mもあろうか。

この日我々は軽い気持で地図も持たずに行った為、ルートが判からなくなり、ブッシュの中を